

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	高橋 美香【論文博士】 【比較文化学専攻 平成4年度生】 (平成7年3月31日 単位修得退学)	要 旨
論 文 題 目	増賀説話の形成と展開	<p>本論文は、奇行と過激で知られながらも一方では遁世者の理想像とされる多武峯（現奈良県桜井市の談山神社）増賀（917～1003）の説話の形成・展開・変容を探ったものである。</p> <p>第一章では、新資料として宮内庁書陵部所蔵の「春夜神記」が取り上げられ、辞世和歌中の「くらげの骨」をめぐって、また臨終の様子と改葬をめぐる奇跡譚を記した「僧道義注進状」、「結縁衆詩歌」などの位置づけや解釈などから、増賀が法華経持経者として往生したと多武峯山内では理解され、後の往生伝に影響を与えたことが論じられる。</p> <p>第二章では、院政期から室町期にかけての特徴あるいくつかの増賀説話が考察の対象とされ、増賀の人物像の形成と変容が検討される。その結果、増賀の臨終往生譚の伝承者として『続本朝往生伝』の編者・大江匡房の舅である僧素意に注目すべきこと、増賀と寂心の邂逅譚などから不動経の享受が説話に新たな展開をもたらしたこと、さらに室町期には高僧と母の結びつきの重視によって説話に変容を遂げることなどが解明される。</p> <p>第三章では、中世末期から近世前期にかけて作成された「南山講式」、「増賀上人行業記（絵巻）」、「談山如意輪観音来」、肖像画などの文物を手がかりとして増賀説話の展開が探られ、増賀の奇行譚や人物像の変容は中世の終結ともに終息し、高僧としてのイメージの定着が窺えると結論される。</p> <p>本研究の特徴のひとつは、従来の研究で重視されてきた奇行譚、あるいは伝承の虚実の弁別ということではなく、むしろ奇行譚以外の伝承や新出資料への積極的な取り組みと、文献以外のモノ資料への注目である。そのことによって増賀説話研究に新たな問題や論点を追加することになった。</p>
審 査 委 員	(主査) 教授 安田 次郎	
	教授 浅田 徹	
	准教授 松岡 智之	
	教授 古瀬 奈津子	
	教授 宮内 貴久	